

森と海の関係を見つめるまち（気仙沼市）

気仙沼市立気仙沼小学校 小松英紀

1. 地形が水産業を育てた

気仙沼は昔から漁業が盛んだった。リアス式海岸とその近くまで迫った北上高地に挟まれた狭い平地では、農業に頼ることもできなかったからだ。



原始時代の単純な狩猟的漁業に始まった当地の漁業は、帆船時代を迎えると、三陸沖へ出での近海漁業に発展し、江戸時代にはかつお漁の基地になった。江戸時代の末期に湾内で江戸前もののりの養殖が始まり、現在では遠洋・沖合漁業の生産量の減少から、かきやほたて貝、ホヤ、わかめなどの養殖が行われている。養殖された良質の水産物は日本全国に流通している。また、遠洋漁業ではまぐろ漁、近海ではかつお漁やさんま漁の基地として日本有数の水揚げ高を誇っている。

2. 森と海のかかわりが明らかになる

隣の岩手県室根村から気仙沼湾に注ぐ大川はまちの貴重な水源である。この大川の水量が不安定であることから、予想される人口増にともなう飲料水や農業・工業用水の確保を望む声が上がリ、昭和五十年代にダム建設の動きが高まった。時を同じくして、湾内の水質が悪化し、養殖のかきなどが育ちにくくなり、品質が低下した。この原因として、農薬の影響や生活排水・水産加工場の廃液（魚の血液）などによって海水が富栄養化して赤潮を招いたことなどの影響が考えられた。

危機感をもった漁民はフランスまで赴き、かき養殖の地理的な環境を調べた。養殖する湾には、うなぎが育つほど水質のよ

い口ワール川が注ぎ込んでいた。上流まで遡ると、源流一体には落葉広葉樹の森が広がっていることがわかった。大川の源流のほとんどの山は原生の広葉樹が切れ、杉に植え変えられていた。杉は落葉広葉樹と異なり、落ちた葉はよい腐葉土にならない。また、その根も広葉樹と違って水を浄化する働きが少ない。帰国後、北海道大学に調査を依頼し「大川が気仙沼湾の養殖を支える栄養を運んでいて、大川がなければ養殖の生産の90%が減る。もしダムができると、川の豊かな生態系は破壊されてしまう」という結果を得た。平成元年、「牡蠣の森を慕う会」が結成され、大川の源流である岩手県室根村の「ひこばえの森」への植林活動が始まった。広葉樹を山に植え、



大川の水質を元に戻そうとする活動である。

この運動が始まってから、しだいに気仙沼湾の水質は改善され、養殖の生産高も回復した。その後、ダムの建設計画は凍結された。

また、この活動を手本に、川の源流に広葉樹を植林し、豊かな海を取り戻そうとする活動は全国に広がった。

現在も気仙沼湾は豊かな養殖漁場である。気仙沼の養殖漁業は「取る漁業から育てる漁業へ」だけでなく「育てるだけでなく、育つ環境を整える漁業へ」と向かいつつある。

